

道徳世界に含まれるのは人間だけか

－人間と動物のあるべき関係を考える－

角北迅（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：動物、環境倫理、人間中心主義、自然中心主義

序論

人間は誰しも等しい権利を持っていると考えられている。一般的にそこで言われる権利は人間だけのものであり、人間以外の動物、植物に権利は認められていない。それはなぜだろうか。人間以外の生物も人間と同じ生命を持つ存在であることを否定する人はいないだろう。しかし彼らは、今現在異なる扱われ方をされている。もちろん人間と他の存在は様々な部分で異なるが、そうした扱われ方の違いは正当な理由によるものだろうか。

人間以外の存在に対してどのような態度をとるのかという、この問題は、環境倫理学という領域において様々な形で議論されている。そして、異なる立場、異なる根拠による議論は、しばしば衝突を繰り返している。しかし、それらが奨励する活動や実際の判断——自然の保護、動物への配慮の重要性、自然に害を為す人間の経済活動の自粛など——の間に、大きな差異はないように思われる。本論文の目的は、そうした議論のうち、代表的ないくつかの立場を紹介し、それらが相互に対立しながらも、動物の保護という点で一致しうるところを示す点にある。

第一章 道徳世界の境界とその枠組み

第一節 道徳世界の境界

道徳世界とは、我々が直接的に道徳的義務を負っている存在（義務の対象）からなる世界である。アンゲリカ・クレプスは、どういった存在が道徳世界に含まれるかという問いに対して提示される答えの候補を列挙している。そうした答えの中には、感覚能力を持つ動物や、植物、あるいは自然全体を道徳世界に含める立場がある。

第二節 拡張主義的戦略とそれに対する批判

道徳世界の境界をめぐる様々な答えは、大きく二つの立場に区分される。すなわち、直接的な道徳的配慮の対象を人間のみとして、その他のあらゆる自然を排除している人間中心主義的な立場と、人間にとっての価値とは独立に、自然物に対して道徳的な配慮の必要性を主張する自然中心主義的な立場である。クレプスはこれらの立場を「外延的人間中心主義」と「外延的自然中心主義」と呼び、前者から後者への移行を

試みる戦略を、「人間中心主義脱却のための拡張主義的戦略」と呼ぶ。

拡張主義的戦略に対しては、そうした試みが人間のパースペクティブに基づく限り、問題は解決しないという批判もある。しかし、我々人間が人間のパースペクティブを離れて道徳的価値について語ることは不可能であり、「認識的」には人間中心主義を脱することはできない。（認識的人間中心主義と対比されるのは認識的自然中心主義である。）人間非中心主義の立場をとるために、認識的自然中心主義という不可能な立場にコミットする必要はなく、認識的には人間中心主義であっても、外延的に自然中心主義であることは可能なのである。

第二章 全体主義的議論

第一節 アルネ・ネスのディープ・エコロジー

第一章で取り上げた「自然中心主義」の立場をとる全体論的環境倫理学の問題点を考察する。考察の中心となるのは、ディープ・エコロジー（以下、DEと略記）である。DEとは、1973年に発表されたアルネ・ネスの論文で発表された思想である。この論文でネスは、それまで主流であった人間中心主義的な環境倫理学を「浅いエコロジー」と批判し、人間だけの利益とは独立に、自然に価値を見出し、人間と自然との関係を持続可能なものとする「深いエコロジー」運動を主張した。DEは広義の意味として、生命中心主義に基づくエコロジー運動のことを指し、人間中心主義に基づく環境保全などに対比して使われるが、狭義の意味としては、ネスの提唱するエコロジー哲学「エコソフィ T」を指す。エコソフィ Tとは、自然物との同一化と自己実現という2つの概念を柱にして、環境保護運動を支持するものである。

第二節 エコソフィ Tの問題点

第一章で取り上げた拡張主義的戦略に対し、全体論的環境倫理は人間から独立に価値評価を行い、それによって道徳世界を形づくる絶対的戦略を主張している。しかし、人間の認識を超えた形で道徳的価値の評価がなされたとしても、それを我々は議論に取り入れることはできない。そうした絶対的な評価は神のような存在によってのみなされることになるが、形而上学的な議論や神学的な議論は誰にでも受け入れられる

ようなものではないため、動物保護や環境保護の根拠としては弱くなってしまふ。また、ネスのエコソフィアは、自然の人間と自然が本質的に一体であると主張するが、この点であらゆる人から同意を得られるとは思われない。よって環境倫理や人間と動物の関係についての議論において、全体論は退かなければならないだろう。

第一節 エプロンダイアグラムとディープ・エコロジーのプラットフォーム

広義の意味でのDE運動は、生命中心主義的な根拠により環境を保護しようという点では一致しており、互いに密接な関係で結ばれている。他方で、それらは様々な思想や哲学からスタートしており、同じ目的を持った者同士でも衝突をする可能性があるかもしれない。しかしネスは、諸々のDE運動にそうした違いがあっても差し支えず、むしろその多様性が力になると考えている。そこでネスは、DE運動において多様な思想的背景をもつ人々の最低限のコンセンサスを得られるプラットフォーム(綱領)原則を発表した。それは8項目から成り、どのような学問の人々、または一般の人々でも理解できるように比較的短く、専門的な語を使用せずに作られている。このプラットフォームに同意することで異なる立場の人々も協力してDE運動に取り組むことができると、ネスは考えたのである。

第三章 個体主義的議論とプラットフォーム

第一節 ピーター・シンガーの動物解放論

ここでは、動物への道徳的配慮の必要性を説くピーター・シンガーの理論を取り上げる。彼の議論は、個体主義的であり、全体主義的なDEとは異なる。

シンガーは、利益というものを普遍化し、誰の利益かを問わずに利益を単に利益として扱うことが平等の基本原則であると考えた。そして、そうした「利益に対する平等な配慮」は人間だけではなく動物にも適用することができることを主張する。シンガーが利益として採用するのは、快および選考充足である。そしてこれにより、動物もまた配慮の対象になるのである。

第二節 プラットフォームへの同意

それではシンガーの思想は、二章で提示したプラットフォーム原則にどの程度同意できるだろうか。プラットフォームの第一原則は以下の通りである。

地球上の人間とそれ以外の生命が幸福にまた健全に生きることは、それ自体の価値(本質的な価値、あるいは内在的な固有の価値といってもよい)を持つ。これらの価値は、人間以外のものが人間にとってどれだけ有用かという価値(使用価値)とは関係のないものである。

ここでは、「生命が幸福にまたは健全に生きることに内在的な価値を認めるか」という部分が重要になる。ネスは自身のエ

コソフィアの中でそうした内在的価値を自然の中に認めている。そしてシンガーも、幸福を享受できる主体に内在的価値を認められると思われる。それゆえ両者はこの項目に関して合意できる。ただし、両者の間には無視できない違いもある。なぜならネスにとって生命とは、小動物はもちろん植物や昆虫などの生物を意味するが、シンガーにとっては快苦を感じることでできる動物——これに加えて、選好を抱くことができる人格——に限られるからである。しかし、こうした相違にもかかわらず、少なくとも快苦を感じることでできる動物に関しては、両者ともに保護へ向けて協力できるのである。

このような形で、シンガーの主張からもプラットフォームへの同意を得ることは可能である。(残り7項目に関しては、要旨の紙幅の関係から割愛する。)同意を得られた範囲での活動は他の立場との衝突を起こしにくく、確実に行動することができる。対立する双方の同意を得られる部分から自然保護の活動を確実に進めていくことが、こうしたプラットフォームを設ける目的である。このようにして、全体主義的な立場とは異なる立場であるシンガーも、プラットフォームに同意し、ネスと同様の活動を協力して行うことのできる可能性があるといえる。

結論

本稿のタイトル「道徳世界に含まれるのは人間だけか」という問いに対して、明確な答えを示すことは難しい。拡張主義的戦略をとったとき、境界をどこまで拡張するべきかという問いに対する明確な答えを出すのは容易ではないのである。実際、拡張主義的戦略による人間非中心主義の立場は多種多様であり、衝突を繰り返している。ネスのプラットフォームは、そうした人々が、合意できる範囲で相互に協力し、実際的な活動を行うための枠組みを示している。プラットフォームにもとづいてともに活動するさいには、更なる議論が必要になると思われる。しかしそうした議論を通じて、合意できる領域がさらに広がっていき、さらには、いまよりも望ましい動物との関係を見いだすことができるのではなかろうか。

主要参考文献

- ・ アレン・ドレングソン『ディープ・エコロジー』、井上一訳、2001年、昭和堂
- ・ アンゲーリカ・クレプス『自然倫理学 ひとつの見取図』、加藤泰史・高畑祐人訳、2011年、みすず書房
- ・ ピーター・シンガー『実践の倫理』、山内友三郎訳、1999年、昭和堂